



特集

「学び舎」の 現在と未来

感性を育み、知が共振する教育施設

四角い教室が整然と連なり北側に直線的な廊下が東西に走る。南側にはふんだんに自然の光を採光する大きく開かれた窓。そうした従来の「学校」のイメージが大きく変わろうとしている。少子高齢化、教員の働き方改革、更には施設の老朽化。教育の現場は多くの課題を抱えながら、教育のあり方自体も問われるようになった。学校は単に知識を移植する場として存在しているわけではない。学校づくりは教育そのものを創造しようとする行為でもある。春風に頬を染め学校の門をくぐる新入生たちの笑顔がはじける。知的好奇心と未来を拓く使命感に胸を膨らませ知の探究に歩を進める若者たちがいる。そんな季節を迎え、教育の器づくり、学校建築について改めて考察する。



車」という言葉に表される問題を誘発し、昭和四十年代に教育改革の必要性が叫ばれるようになります。一斉授業から脱して、一人ひとりを大事にし、個性を育む教育が目標となり、先生同士の協働、弾力的な学習集団編成など、多様な教育方法が模索されるようになった。そこで気付いたのが、画一的、固定的な教室空間のあり方が制約になることでした。英米のオープンスクールの動きも参考にしながら、教室にオープンスペースを組み合わせた先進的な学校施設の事例が現れました。国もオープンスペースの設置や地域性を生かした施設整備を進めるため補助制度や指針などを整え、昭和六十年代に学校整備は大きな転機を迎えることとなります。子どもたちの立場から学校を変える必要があり、それが期待されているという認識が広がっていきました。

また、昭和五十年代からはコミュニケーションの形成が重要視されるようになり、社会の高齢化や情報化を見据えた生涯学習も課題とされ、学校はその拠点として捉えられるようになりました。夜間や休日はい空いてい

る学校施設を有効活用して地域の交流や活動の場としようということでした。

—教育が変わり始めると学校や教育施設も対応する必要がありますね。

—教育方法と施設や空間は密接なかわりがあります。多様な学びの場と生活の場、両方を豊かに実現する空間のあり方が問われるようになりました。そのムーブメントは平成になって加速し、国や自治体も新たな視点をもって学校施設整備が進み始めました。

— それでは誰が整備、設計、建設を担うのか。また、どのように課題を整理し、目標を立てればよいのか。変革には新しい情報が必要です。私ども教育環境研究所も、そのための情報発信の一翼を担うことを目的として設立され、今年三八年目になります。

— 什器や設備、内装材などのメーカーも新たなビジネスチャンスを見出し、製品開発などを通して学校建築の変革に寄与すると同時に、新しい動きを広めるといふ社会貢献をしました。学校施設の変革を実現す



大学習室(右)と授業風景(左)。東京都港区立三光小学校において「壁のない教室」である大学習室がつけられた。1970年代としては先駆的な教室の形であり日本における公立小学校初のオープンスペースと伝えられている(三光小学校、出典：デジタル港区教育史)



子どもたちと地域の想いを すくい上げる学校

株式会社教育環境研究所
理事長

長澤 悟 Satoru Nagasawa

学校施設は大きな転換点を迎えている。多様な学びに応え、生み出す機能性だけでなく、居場所としての豊かさが求められ、地域の核としての役割が高まっている。今日までの学校建築の歩みを振り返りながら、未来の学び舎、教育環境のあり方について、これまでに三〇〇校余の学校づくりに携わってきた(株)教育環境研究所(IEE)の長澤悟理事長にお聞きした。

学校大量建設の時代から

— 日本の学校、教育はどのように変遷してきたのでしょうか。その歩みについて概観していただけますか。

近代学校の誕生は明治の学制發布からです。欧米列強に追いつくために人材の育成が急務とされ、擬洋風校舎など学校建築の模索が始まりました。やがて一人の先生が同時に教える生徒の人数は最大八〇人、ひと坪当たり四人という考えのもと、二人机が一斉に並ぶ四間×五間の教室が定着していきました。大正期から戦前にかけて児童中心主義の教育思潮をもとに学校建築は



明治時代の授業風景(筭小学校、出典：デジタル港区教育史)

充実期を迎えました。戦後は戦災復興、児童生徒数の急増、不燃化などに対して「量的」な整備が求められ、鉄筋校舎の標準設計が開発され、それにより建設が可能になる一方、学校建築は画一化が進みました。

— 量産された画一的な学校で型どおりの教育が行われていた時代ですね。

— 前提となった一斉授業一辺倒の教育は「落ちこぼれ」や「見切り発

るうえで、民間企業の力は大きかったと思います。

—そうした時代にあつて建設業界の動向はどのようなものだったのでしょうか？

学校施設の変革は、最初は大学の研究者が教育や施設の先進校の調査を重ね、課題を見極め、目標を示すとともに、基本計画・基本設計の提案を行い、それを受けて地域の設計事務所が実施設計を担うという、研究者+地方設計事務所の体制が進められました。平成に入る頃から、設計の重要性が認められるようになり、研究者+アトリエ設計事務所が学校設計の変革を先導し、デザイン的にも特色ある学校が生まれました。その間にも学校教育は深化を続ける一方、防犯・安全・シックハウス対策、エコスクール、木材活用など、安全・安心・環境に関する課題への対応が進み、量的な整備の時代を越え、質的充実に向けて学校施設の変革の機運は更に高まってきました。小中一貫教育や地域の教育施設に向けられるニーズに応える複合化など、学校の設計は更に多様化し、技術的な提案も求められるよ

学校づくりのワークショップには子どもたちも一緒に参加することが大切です。大人たちが真剣に考え、自分たちもその場に参加しているという想いは深く心に残ることでしょう。学校は育った故郷の良さを子どもたちに刷り込む場所。かけがえない思い出が未来につながることで持続可能な地域ができます。学校づくりは子どもたちを中心として未来を考える機会となります。東日本大震災後の学校を核とした地域復興にかかわつての実感です。

—その地域の歴史や文化を踏まえながらどのような学校を整備すべきかを語り合うということでしょうか？

「べき」という言葉は学校づくりには相応しくない。どこかに正解があり、そこに辿り着こうとするのではなく、みんなが参画するプロセスを通して、従前の価値観にとらわれないことなく、ここにしかない学校のカタチを一緒に創り出す。その姿勢が大切なんです。

—子どもたちの考えや要望を取り入れることも大切になりますね。

子どもたちの絵や作文、先生と

うになり、大手組織事務所も学校設計に積極的に参入するようになって今日にいたつています。

学校の建設は地方の建設会社にとつてはとても大きな事業です。わが町を活性化する拠点としてその整備にかかわろうとするモチベーションは高い。自分たちの学校という意識をもつて力を注ぐ意欲的な取組みは大きな役割を果たしてきました。近年は総合的な技術力や状況に対する即応力が求められ、実績をもとにしたゼネコンの力が必要とされています。

子どもたちの声に耳を澄ます

—時代に呼応する学び舎をつくらうとする時に求められる意識とは？

学校を変革しようとする時に求められるのは設計上のアイデアや機能性だけではありません。「教育を変えよう」という意識が軸になければならない。なぜ変えなければならぬのか、どんなことが期待されているのか、そのために必要な学校運営とは。そうした基本的な問いに答

のやり取り、ワークショップでの発言などを通して、想いをくみ上げること、言葉にならない子どもたちの声に耳を澄ますことが大切です。以前、中学校の計画で、最初に学生たちと一緒に子どもたちの一日の様子を観察した後、たくさんの方を見ながら議論をしていた時、教室以外で子どもたちの座っている写真が一枚もないと一人の学生が叫びました。学校には自由時間に居場所としてくつろげる場がなかった。小学校の計画では、低学年の子が描いてくれた学校生活の絵は、トイレの洋式便座に腰を下ろしている姿の上に「ホッ」という言葉が添えられていました。その子にとってトイレの個室は心がほどける唯一の場所だったんです。そこからはトイレを清潔、快適な空間にすること、それだけでなく一人になれる居場所を学校の中はどう用意するかがテーマになりました。こうした子どもたちとの対話から学校づくりの新たな視点が得られます。

—子どもたちの繊細な感性に加えて、地域の文化や歴史、保護者や教師の要望といったことを建物に反

え、検証しながら意図どおりに使われる施設を目指すことが大切です。

そこで忘れてはならないのが教育に向かう教職員の想い、保護者や地域の人々の理解、そして子どもたちの願いです。関係者の夢や志をいかにしてくみ上げるか、これらの人々が参加する計画プロセスがとても重要になります。

学校に関しては「誰もがプロ」。小中学生という成長期、多感な9年間を過ごした学校にはみんな語り尽くせないほどのアイデアを持っています。そうした人々の対話を通じて学校づくりは進展し、竣工時には喜びを共有できるのです。完成にいたる過程はみんなが地域のありようを考

えるまたとない機会となります。施設の完成はゴールではありません。学校が地域を支え、地域が学校を支える学校づくりのスタートです。その担い手を育てるのも参加のプロセスです。

—学校の主人公である子どもたちもそのプロセスにかかわることができませんか？

だからこそ学校づくりは面白い。施設の計画、設計だけでなく「学校づくり」という言葉は今、文部科学省でも当たり前のように使っています。教育というソフトと施設というハード、学校と地域、子どもたちの学びと生活の場であり、地域の皆さんの拠り所でもあるということが認識されています。多様な教育方法に「対応する」のではなく、新しい学びを「実現する」ものとして施設環境を捉えることが求められています。

最後に一言。ある学校の改修で、内装に赤味と白味の杉板を交互に張っていました。大工さんが現場で選り分けて意匠に生かしていたのです。ここで成長する子どもたちの顔を思い浮かべながら仕事をしていたことでしょうか。こうした子どもを思いやる気持ち



撮影：小川茂雄

3



撮影：佐々木育弥

2



1

IEEの近年の活動実績

1. 大熊町立学び舎ゆめの森(福島県)
IEE業務：基本構想・基本計画、設計者選定支援、計画指導
竣工：2023年 設計：アーキシップスタジオ・鈴木弘人設計共同企業体
施工：大成建設東北支店
受賞：福島県建築文化賞正賞、グッドデザイン賞ほか
2. 安平町立早来学園(北海道)
IEE業務：基本構想・基本計画、設計者選定支援、計画指導、教育環境整備支援
竣工：2022年 設計：アトリエバンク
施工：丸彦渡辺・森本組経常建設共同企業体
受賞：北海道赤レンガ建築賞ほか
3. 陸前高田市立気仙小学校(岩手県)
IEE業務：基本設計、実施設計、工事監理
竣工：2018年 設計：綾井・土屋・IEE設計共同体
施工：佐武建設
受賞：JIA東北建築大賞、木の建築賞、公共建築ほか

学びが深化し続ける「森」となった学校

大熊町立学び舎ゆめの森

被災地に建った 「どこにもなかった学校」

福島県双葉郡大熊町は二〇一一年の東日本大震災に起因する原子力発電所事故により全町避難を余儀なくされた。一万人余りの全町民がこの町を離れ、小中学校も閉鎖される。避難指示が解除されたのは八年後の二〇一九年。被災一五年を経て町内居住人口は現在千人余りだが、インフラの復旧、公営住宅や商業施設などの整備も進み徐々に賑わいを取り戻しつつある。

その大熊町大川原地区に二〇二三年、新たな義務教育学校が開校した。「大熊町立学び舎ゆめの森」は認定こども園、小中の義務教育学

校を再開。当初は七〇〇名だった生徒も、二〇二二年のゆめの森開校時にはわずか七名だった。二〇二一年、その学校に赴任した後、ゆめの森の初代校長に就任、二年間この学校の礎を築いた佐藤由弘教育長にお話を伺った。「町は震災を機に、そもそも学校とはどういう存在なのか真剣に考えてきました。会津にいた頃、このゆめの森を初めて目にした時、この建物、空間をどう使いたいか、それが最大の課題になると直感しました」。数十年はかかると思われる原発事故からの町の復興、その要となるのは人づくりだと覚悟を決めた。ゆめの森はその起点になったと振り返る。

今までになかった学校を使いこなすには、自らを含め教師の教育に対する既存概念を根底から覆す必要があった。四角い教室で管理され

校、学童保育が一体となった全国でも珍しい学校だ。〇歳から十五歳の子どもたちがシームレスにつながりともに学び、過ごしている。建築物としてのコンセプトは「混在と多様性」。S造（一部RC造）二階建て、延べ床面積約八、〇〇〇平方メートルの学び舎の設計はアーキシップスタジオ・鈴木弘人設計事務所JV、施工を大成建設（株）が担った。町長が掲げた構想「どこにもない学校」を見事にカタチにした。

三角形の構造フレームをベースに木材を主とした間仕切壁や家具が縦横に接続し、比類のない自由度をもって開放的な空間を生み出している。いわゆる「教室」と言われるスペース割も希薄だ。説明がなければ

た教育を施す、その概念を変える。

佐藤氏は開校前、教師が着任するまで下駄箱や職員室の席、担任すら決めなかったという。「当然、先生方からは学校が始まる前に何も決まっていけないとありえないと声が上がります。しかし、誰一人答えを出せない原発事故に見舞われたこの町で人づくりに挑むのだから、私たち教師自身もこの場所で何ができるのか考えようと対話を続けました」。正直、先生方とのバトルもあったと笑う。しかし、マインドセットを変革する必要は誰もが自覚していた。他者を否定しない、されない心理的安全性を維持しながら議論が進む。その安心感は子どもたちにも伝播し自主性を育むことになった。結果として、今日の授業の場所はその日の朝に子どもたちと相談して決める。生徒一人ひとりと話し学びの進捗を見極めて授業を進める。教師は「教育をデザイン」する「デザイナー」と呼称する。そうした主体性に満ちた学びと教えの環境が整っていった。

勉強する小学生のかたわらを幼稚園児たちがバギー車に乗せられ





2



学び舎 ゆめの森の校舎は11のエリアによって構成され、子どもたちが考えた11のオノマトベからなる名前が各エリアに付けられている。
 1.わくわく本の広場。校舎中央に位置する吹抜けの図書ひろば
 2.のびのび学び室側に広がる図書スペース。中央の図書ひろば以外の各エリアに本棚が並び、子どもたちが好きな時に、好きな空間で本を読める環境がデザインされている
 3.ここがサポータールーム。ガラス張りの教職員スペースがあり、開放的なつくりになっているため、子どもたちはいつでも気軽に訪れ、先生とコミュニケーションを取ったり、授業を受けたりすることができる



3 1

うか。教育で地方創生を実現する、ゆめの森はその有効な事例にもなると考えています」。

帰還・移住の誘因が、ゆめの森という唯一無二の空間とそこで日々繰り広げられる人づくり、教育の独自性であることは想像に難くない。「子どもたちの表情がとにかく生き生きとしています。人と教育にとって空間の作用はとても大きい。そのことをもつともよくわかっている設計者、施工者が地域の志を踏まえ、力を尽くしてくださったからこそ実現できた教育施設なのだと改めて感じています」。

ゆめの森は義務教育学校だ。校長や教員は三、四年で異動する可能性が高い。ここで培われた教育の志をいかに未来へ継承していくかが今後の課題になると佐藤氏は最後に心中を明かしてくれた。「私自身、震災とゆめの森がなかったら教育者として全く別物の人生を歩んでいたかもしれない。それほどワクワクさせてくれる学校です。地域の皆さんとこの建物がゆめの森の思想と精神を受け継ぎ、教育のエコシステムのようにこの『森』をつないで



福島県大熊町教育委員会
 教育長
 佐藤 由弘 Yoshihiro Sato

学び舎 ゆめの森は150人の子どもたちを受け入れることを想定して整備された。その上限を超える日も近いかもしれない。しかし、周辺の用地と三角形のフレームを生かし増築できる余地はあるだろう。「ここで取まらなくなったらインキュベーションセンターでも、この隣の商業施設でも、近所のおじいちゃんの家でも、学びの場はたくさんある。町中がゆめの森になればいいと思っています」と佐藤氏は子どもに負けない笑顔で話す

いつてくれると信じています」。

「突き抜けた設計」をカタチにする

ゆめの森の施工現場を率いた大成建設の大学誠作業所長は、初めてゆめの森の模型と図面を見た時のことをこう振り返る。「従来の四角い教室が並ぶ学校のイメージに全くとらわれていない、敷地も広く建物を取り巻くように園庭や校庭が配置されている、コロナ禍で人材や資材がひっ迫するなか複雑な建屋と広大な外構を並行していかに工期を全うするか…なかなか大変な現場になるなと」。実際に施工が進むにつれ初めて遭遇する局面が少なくなかったと笑う。

同社東北支店の渡邊民雄営業部長も「被災地という特殊な立地に加え、木材を主とする複雑な構造体。難しいからこそゼネコンの力を最大限発揮できる案件だと感じました。何よりも大熊町の復興に協力したいという気持ちが強くあり、支店と現場はその気概をもって動いていたと思います」と話す。

ゆめの森に通う園児・児童生徒は昨年一〇〇名を超えた。その七割ほどは県外からの移住者だ。大熊町は二〇三〇年までに人口四、〇〇〇人を目標に掲げており、ゆめの森は人口増をリードする可能性がある。佐藤氏は肌感覚だがと断ったうえでこう話す。「子どもたちが増えている町ならば戻ってもいい、あるいは移住してもいいと考える方が相乗的に増えているのではないでしょ

新しい教育が人を呼び込む

ゆめの森に通う園児・児童生徒は昨年一〇〇名を超えた。その七割ほどは県外からの移住者だ。大熊町は二〇三〇年までに人口四、〇〇〇人を目標に掲げており、ゆめの森は人口増をリードする可能性がある。佐藤氏は肌感覚だがと断ったうえでこう話す。「子どもたちが増えている町ならば戻ってもいい、あるいは移住してもいいと考える方が相乗的に増えているのではないでしょ

て散歩に出かけていく。時には小学生の工作に園児が交ざって工作遊びが始まることもある。町内には若い起業家や学生たちの活動の場としてインキュベーションセンターが置かれたが、彼らはゆめの森の一部をサテライト室として活用している。そこに子どもたちが自然と集い一緒になってロボットやドローンを囲んで賑やかな対話が始まる。ゆめの森はまさに学習指導要領に示された「主体的・対話的で深い学び」「アクティブラーニング」が日常的に同時多発する場となった。

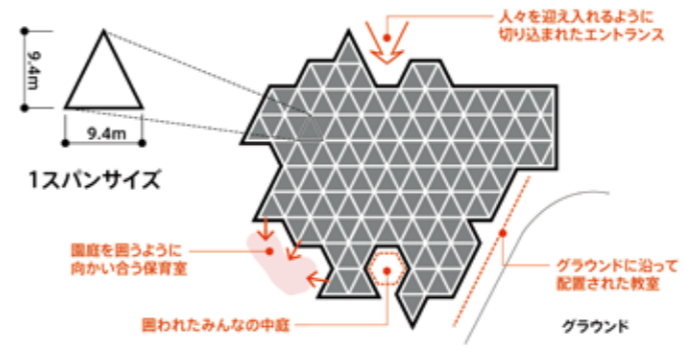


知のコモンセンスを誘発する探求の場

慶應義塾大学Y11

提供：株安藤・間

三角フレームを組み合わせた特徴的な形状



提供：アーキシップスタジオ・鈴木弘人設計事務所JV



大成建設株式会社
東北支店
営業部長
渡邊 民雄 Tamio Watanabe

その情熱が施工者としての意欲にも大きく作用することになる。素材の選定では資材を大気に触れさせてその影響を試す暴露試験を行ったうえで、構造や施工法を確認するためのモックアップを制作し、現地で検証した。現場にほぼ常駐する設計者と二人三脚で合理性を追求

大成建設が現場に赴いたのはゆめの森の詳細な設計が決まった後のことだった。実はここにいたるまで大熊町と設計事務所の間で熱を帯びた議論が繰り返された。当初の設計方針は中央の大きな図書ひろばは変わらないものの教室は矩形とする発想があった。その方向性に町は「どこにもない学校」の信念を貫くべく更に「突き抜けた設計」を要望した。これに応えようと設計者の意欲に火が付く。結果として三角

形のフレームによる独創的な建物が実現した経緯がある。大熊氏は「施工者は発注者や設計者の意図をカタチにすることが仕事ですが、ゆめの森についてはその根底にある大熊町の姿勢、設計者の志の強さが通常の建築物とは全く違っていました。図面や模型を目にした時、大熊町が置かれている社会的背景や設計の真摯な考え方が伝わってきた。私自身とても貴重な体験でした」と話す。



大成建設株式会社
作業所長
大學 誠 Makoto Daigaku

求した。「建築には図面どおりにいかないことが多々あります。その課題を一つずつクリアしてきた。結構地道な作業を真剣に繰り返してきました」と大熊氏は笑う。

地図に残る次世代の学校

見学会も頻繁に開催された。それ以前に現場は日常的に周囲の注目を集める存在だった。「毎日のように子どもたちや周囲に暮らす方々の視線がありました。この建物の完成を心待ちにしている様子が日々伝わってくる。その期待に何としても応えたい。そうした熱が現場全体に満ちていたように思います」と大熊氏は記憶を辿る。引き渡し後にも何度か学校に足を運んだ。その際に学校側から「生

徒がのびのびと学んでいる」と聞かされたという。「子どもたちの笑顔にこの建築の力が寄与しているとおっしゃっていただきました。学校の運営方針によるところも大きいとは思いますがとても嬉しかったです。町の総意と設計者の熱意をカタチにすることができました。今後進化し続ける学校になると信じています」。

大成建設は「地図に残る仕事。」を標榜する。ゆめの森は新たな地図に新時代の学校としてその名を残し続けることになるだろう。渡邊氏はそうした意味でもこのプロジェクトは大変興味深く、貴重な知見を与えてくれたと話す。「竣工後、学校にご挨拶に伺った際に将来名だたる大学に進学する子どもを大勢輩出することになるのでは?と話す」と、町長は「この学校が目指しているのはそこではないんです」と断言されました。その言葉が今でも心に残っている。これからの学校、教育施設のあり方を示唆する一言でした。「ゆめの森が「そこ」ではない教育の地平を拓いていく。」

ウナギの寝床から生まれる知的な交流

東急東横線、横浜市営地下鉄の日吉駅の目の前、およそ一〇万坪の敷地に慶應義塾大学の校区が広がる。一、二年生はその日吉キャンパスで、理工学部の三、四年生は北側の谷を一つ隔てた矢上キャンパスで学ぶ。昨年四月、矢上に産学官が連携するイノベーション施設「YIL (Yagam i Innovation Laboratory)」がオープンした。奥行き約五層、延長約五〇分のS造二階建ての建物はまさにウナギの寝床のような細長い空間。奇しくもウナギの英名(eel)と発音が似ていることから「イール」と呼称される。コンセプトは「ひとがつながりイノベーションが起こる場所」。国内外の社会的な課題の解決策を見出し、スタートアップを通じて新産業の創出の場と機会を提供する施設として学生や教職員、ゲストに開放されている。一階は「集う」をコンセプトに掲げた全面ガラス張りのラウンジ、二階は「試す」をテーマにした試作

一階には様々なイベントに供される大型ビジョンを設置した「LIVE HUB」や、リラクセスした時間を過ごす「PICNIC」、コーヒーマシンなどを備えたカウンターでくつろげる「EAT&LEARN」といったコーナーが直線的に並び、二階はモントーンの落ち着いた雰囲気。ロボットや研究機器が常設

建築物を増築する際には既存と新規の建物を廊下で接続することが基本になる。今回のプロジェクトでも当初はその方針だったが、あえてその定石の一線を越えた。設計施工を担った(株)安藤・間の弓野将義設計主幹はこう説明する。「三六

と科目の履修が主目的となり、講義が終わると早々にキャンパスを後にする。そうした日常から交流が生まれることは難しい。教授陣にはそうした課題感が潜在していたと諏訪氏は振り返る。「三年生に『居場所』を提供して交流を促すということは第二のテーマと言ってもよかった。そのために洗練されたカッコいい、そして開かれた空間が必要だ。当初から教員たちの強い思いがありました」。キャンパスのほぼ最北端の立地だが、現在までに学生や留学生、教職員、ゲストといった多様な人々がイベントやミーティング、自発的な実験、更にランチやティーブレイクといった思いの目的をもって訪れるようになってい

された「STUDIO」や「OPEN LOUNGE」と呼ばれるゾーンが一体的に連続する。いずれにも壁やパーティションといった視界を遮るものがなく、全体を見渡すことができる。しかし、家具の配置や内装デザインによって各エリアのテーマと特徴が自然と浮かび上がり、来訪者は目的に沿ったスペースを体感的に選ぶことができる。

大学のコンセプトを反映させる

棟は横に長く前面は通路だったため、新旧の建物に離隔を設けると奥行きを確保できません。それで既存建物を一スパン伸ばすように新築建物をつなげてしまおうと考えました。慶應義塾大学からいただいたコンセプトシートには「集う」と「試す」の背景にある思想が熱意をもって詳細に示されていました。私

たちはそれをカタチにしていきました」。構法からゾーニングまで施工は慶應義塾大学のコンセプトを反映させることを第一義として進めたという。現場を率いた同社の山村一仁所長も図面からYILの仕掛けを読み取っていた。「交流と研究フロアを明確に分割しながら、同時に一階

YILエリアマップ



提供：(株)安藤・間

実験スペースに位置付けられている。交流拠点の整備は一〇年越しの構想だったという。YILは文部科学省、日本学術振興会の補助事業に採択されたことを機に、既存の産学官連携施設だった三六棟のファサードを解体せず植栽側に約五層増築して整備された。街中のカフェと見まがう洗練された空間は、寝ていたウナギもフツと目を覚ますような穏やかな活気を見せている。YILの開設にいたる経緯と目指すところをYIL運営推進室の諏訪かおり専門員にお聞きした。「本学は『未来のコモンセンスをつくる研究大学』を目指しています。多彩な研究者が領域横断的な研究を展開し、その成果を社会課題の解決、新産業の創出に寄与しようとする構想ですが、その活動拠点として多様な人材のコミュニケーションを促し交流のハブとなるべく整備されたのがYILです」。学生たちが研究室に配属されるのは四年生からだ。日吉から矢上のキャンパスに移動した三年生は日々過ごす場所を見失いがちだ。自ず



慶應義塾大学 理工学部 学術研究支援課 YIL運営推進室 専門員 諏訪 かおり Kaori Suwa



1. LIVE HUBには大型ビジョンを設置、大小多様なイベントやプレゼンテーションのスペースとして活用される。緻密に配置された木製のルーバーが緩やかな浮遊感を演出すると同時にゾーニングの要になっている
2. EAT&LEARNにはコーヒーマシンや冷凍食品の自販機が常設され、日々の飲食はもちろん、教職員・学生などが憩親、交流できる機能を備えている
3. 通路に面した外構は2m足らずだが窓越しに四季の移ろいを感じられる植栽を設けた。緑とガラス窓を通してYIL内外で人の気配を感じることができる
4. SHOWCASE PICNICはパソコン作業や会話など、思い思いの時間を過ごせる場所になっている



5



6



7

5. OPEN LOUNGE / 6. STUDIOは各エリアごとのテーマに沿った研究機器を常設し、学生が日常的に研究装置に触れることができる
7. NDA ROOMは施設内で唯一の個室の会議室。壁にはYILを象徴するウナギの絵が描かれている

のイメージが屋外に流れていく印象でした。外からガラス越しに学生の動きが見えることで人を呼び込み、交流を広げようとする意図が明確でした」。

通路と建物の地盤の五〇センチの高低差を階段ではなくスロープで解消する。既存の雨水処理設備を新旧の建物間の壁内に収めるといった数々のハードルはあった。「大学の施設を建てると聞いていました。が図面には『PICNIC』や『EAT & LEARN』というゾーンがある。最初に見た時は一体どんな建物をつくろうとしているのかと（笑）。それでもコンセプトは明快に理解できた。その実現に向けてとにかく力を尽くそうと考えました」。工期も決して余裕のあるものではなかった。竣工が遅れるような



株式会社安藤・間
建築設計第二部 設計第一グループ
設計主幹

弓野 将義 Masayoshi Yumino

ことがあれば助成の要件を満たすことができず。大学の講義を中断することも難しい。周囲の施設を供用しながらの狭隘な現場での工事には綿密な施工管理が求められたという。設計と施工、そのプロセスにYIL整備の意義が通奏低音として響いていた。

来訪者が相互に触発しあう ステージ

竣工から約一年。YILは目指していた知的な交流の舞台となりつつある。一階では日常的なディスカッションや研究発表などのイベントが頻繁に行われる。二階ではまだ研究室に配属される前の学部生が自発的な実験に取り組む姿が絶えない。矢上キャンパスは高度な実験装置を備えた数多くの施設を既に擁している。諏訪氏はYILが学生の探求心を刺激する入り口になると考えている。キャンパスの一番はずれの立地にもかかわらず多くの学生が足を運んでくれるようになったと、その成果を実感している。「この空間に刺激されて生まれる対話

密度を持たせながら検討を繰り返しました」と弓野氏は話す。そのプロセスには教授陣も参画し、熟議を重ねて最適解となるレイアウトを模索したという。YILは人が集い、対話が生まれ、各々が相互に触発しあいながら新たな発想を導き出す場を目指し続ける。「YILは教育、研究施設というよりは持続的な共創空間と言えるのかもしれない。教室という部屋が効率的に並んでいるだけでは息が詰まってしまふ。夕方に飲み物を片手に気兼ねなくディスカッションを重ね、その交流が新たな発想を誘発する。そうした居場所があればキャンパスライフ



36棟の増築に伴い延焼ラインが変更されたため対面にある26棟の壁面サッシを防火認定品に改修した。狭隘な現場の占有には大学側の全面的な協力があつた

の密度は階段に高くなりますし矢上キャンパスにも愛着が湧く。そんなデザインにしたいと常々思っていました」と弓野氏は振り返る。「YILは共創空間的な性格が強い建物です。他の共創空間をリサーチした時に感じたのが、場所はつくっているがただの共用スペースになってしまうことでした。YILでは目的意識をもって利用できるように慶應様と誰がどのように使うかという焦点を絞った想定や、どのように使うことができるかというよりなより裾野の広い視点での使い勝手を議論し設計に落とし込んでいきました」。

二階の実験エリアの立ち上げには五名の教員がかかわっているという。「本来なら研究内容に沿った五パターンの造作が必要になるはずですがあえてそれを排除した方向性が印象的でした。『集う』と『試す』、交流と研究という行為をつなぐスペースが二階のエリアに求められていると感じていました」。山村氏はこの現場が所長として臨むデビュー戦だった。「この特徴ある外観と内装、しかも所長として最初の



株式会社安藤・間
首都圏建築支店 建築第一部工事
第一部東京メソニックビル作業所
副所長

山村 一仁 Kazuhito Yamamura

がたくさんあります。友達とディスカッションしている学生たちが隣で開催されているイベントに興味を湧いて自然と参加するようになる。壁がないので『部屋』にはなっていない。が、かつ周囲の気配が感じられるようなグラデーションのある空間が多様な交流を生み出しています」。YILがきっかけとなって視野を広げた学生が学会や学術コンテストに参加を決めることもあるという。

一方でそうした壁を設けない微妙なゾーニングは難易度が高いようにも思える。「気配と距離感の関係や音や香りがどう広がるのかを常に考えながら設計をしていました。その過程がとても興味深かった。そこにいる人たちが触発しあう、そうした状況を想定してスペースに自

仕事です。記憶に深く残る現場になりました」と笑みを見せた。

イノベーションを生み出す 建築の価値

YILはあくまで産官学が連携するイノベーションの拠点施設だ。しかし研究、実験という枠を超えて「知」のコモンセンスを誘発する装置とも言えるだろう。その萌芽を未来に向けて受け継いでほしいと諏訪氏は願っている。諏訪氏は建築に関しては専門外だがと言いつつ、えたうえで最後にこう話してくれた。「YILは一部の人の想いだけで開設されたわけではありません。この建物の建設にかかわった多くの方々の意志、強いこだわりが建築物として建ち上がっていく様子を目の当たりにして改めて建築の価値を知ることができました。その感慨は今後この施設を使う過程を通して誰もが感じることだと思います」。

イノベーションは高度な実験装置、効率的な研究施設のみでは起こすことができない。YILはそうした予感を強く漂わせている。